

しやんしやんと、鈴が泣く。  
ほろほろと、里がわらう。

錦織 近



# 序 章

川は雪解け水を含んで滔滔と流れ、溺れそうな頭を必死に突き出している巨岩の手前で、大きなうねりを描いていた。そのうねりに抗うことなく、早咲きの桜の花弁たちがくるりくるりと手をつないで踊るように水面を浮き沈みしている。

川は八つ川。その流れに隔てられた二つの村を、尾花村と山吹村。そしてその二つを結ぶ橋を小僧橋という。つくりの華奢な吊り橋であったころ、口減らしに出された身の軽い使いの小僧しか渡らせなかったということから、その名がつけられたのだという。

さてその小僧橋の真ん中より十歩、二十歩ばかり尾花村に下がったところに、女がいた。「キイ」という名の、十八歳の女である。

膝が隠れるほどの薄紫色の綿衣を腰の辺りでぐるりと幅狭の帯で締め、ゆったりとした裾がひらひらと風に舞う。小さく透けそうなほど白い顔は、肩の上に花芯のようにちょこんとおさまり、身体全体が、頼りなく儂い一輪の花のようである。ぼんやりと遠くを見やる瞳。うっすらと青みを帯びた白目に縁どられてくっきりと際立つ瞳ではあるが、怯える小鳥のように小刻みに震えて焦点が定まらず、細いあごが突き出した方向をたどってみても、そこには夕陽を背負った深山が広がるばかりであった。肌を晒した右足首には二つの鈴が結ばれ、キイはその足で地面をいく度も強く叩いては、しゃんしゃん、しゃんしゃんと澄んだ音色を響かせている。まるでだれかに居場所を示すかのようにしゃんしゃんと詠う足首の鈴。けれどもその主の足元は、温んだ風にさえも掬われそうなほど力がない。

キイよ、お前の鈴はいったいだれを呼んでいるのか。

—

黄金色に染まった尾花村に、夕餉の支度に向かう女たちの声がさざめくころであった。

「キイはまた孕んだんでねえのか」

町まで野菜を売りに行っていた男が、橋に佇むキイの姿を見てふと足を止め、訝しく思い、再び転がるように家路を急いだ。背に担いだ籠を下ろすのももどかしげに、女房に言う。

「腹がよ、こう、ぷっくりと出とるんじゃ。前にもあそこでぼんやりしとるキイを見かけたことはあったがよ、腹が出とることに気がついたのは今日がはじめてじゃ。あれはまた孕んだに違えねえ」

米を研いでいた女房が前掛けで手を拭き拭きやってきた。

「そらほんとか」

「違えねえよ。たしかに腹がぷっくり出とった」

「ああああ。だとしたらえらいことだ。間違えなら、これで三度目になるでないか」

あくる朝、村の女たちが寄り集まる。狭い村だ。毎朝顔を合わせていればなおさらのこと、とりたてて話すことなどない。よく晴れたなあ、よく降るなあと、お天道様のご機嫌を挨拶代わりに声を掛け合えば、それだけで気持ちよく一日がはじまる。井戸端でひそひそと話すことなどまるでないのだ。しかしその日はめずらしく、女たちの声が低い。女たちの眉間に寄る皺が、深く、険しい。

「そいで、キイはまだ起きんのか」

「起きてねえ」

「悪阻は一。悪阻で具合が悪そうにしてるのをだれも見なかったのか」

「見てねえよ」

「ああ、ちっとも気がつかなかったかの」

「おれもさ、おめは」

「ああ、これっぽっちもさ」

「だがよ、じつを言うとなんだかちょっとばっかす肥えてきたような気がしてたんだ」

「おうよ、それはおれも思っと思った」

「なんだあ、おめも気づいと思ったか」

「おお。うすべったかった尻のあたりが妙にまあるくなってきて、なんかよ、こう、もっちりとしてきたっというか、おめ、そう思わなかったか」

そういえばと一人がおずおずと切った言葉が口火となって、キイの懐胎を裏づけるような話が次から次へと飛び出してきた。

ふと気づくといないことが何度かあった。どこに行っていたのか、夕方、摘み取った夏草を胸に抱きしめるようにして嬉しそうに帰ってきたのを見たことがある。橋のたもとに見知らぬ

若い男が立っていて、それに向かって小走りに近寄っていく女がキイに似ていたと亭主が言っていたが、まさかそんなことはあるまいとあっさり聞き流したことがあった。暮れ時に町からの帰り道を急いでいた亭主が橋の下から耳に馴染みのある鈴の音を聴いたような気がしたと言っていたが、そりゃあいくらなんでも空耳だ、あんた耳まで耄碌したかと笑い飛ばしたこともあった。

あんなことこんなこと……ひとしきり話が尽きると、女房たちは思わず顔を見合わせた。聞いてみれば、どれもみな前の年の夏の話ではないか。

梅婆に知らせねば――。だれも、それに反対しなかった。

「またかの」

「いんや婆よ、今度はちいと厄介じゃ」

きのう一人の男が小僧橋でキイを見かけ、その腹が出ていることに気づいて驚いたこと、その話を受けて今朝方女たち寄り集まり、そこで出た話をつき合わせてみると、どうも前の年の夏にキイに何かあったのではないかと思われる節があること。寄り集まった中から使いを頼まれた女は、庭先で近所の子どもの相手をしていた梅婆に向かって、一気にまくし立てた。

頭上には一片の雲も浮かばない青空が広がり、まだてっぺんに届かぬお天道様がぼんやりとした白い光を放っている。しばらくの間梅婆は縁側に腰掛けたまま空を仰いで眩しそうに皺の多い目をしばつかせていたが、やがてゆるゆると瞼を閉じながら鼻から大きく息を吐き出し、ひと言だけ放った。

「明日、連れて来い」

その言葉は温もりを帯びてゆるやかに漂っていこうとする空気の粒を凍らせるように、凜と響きわたった。

キイはお頭が弱い。

人が言っていることはおぼろげにわかっているようだが、それに反応することが難しく、発する言葉も、人の耳には音でしかない。しかしそれに反して、顔立ちは見事に整っている。ほどほどに高い、すっとした鼻梁。ぼってりとした、肉づきのいい唇。奥二重の目は切れ込みが大きく、濡れたようにしっとりとした長い睫が愛くるしい。半開きの口と、絶えずちろちろと小刻みに震えている瞳——それさえなかったら、キイは間違いなく尾花村小町だ。

十二で母親を亡くしてから、キイの面倒は近くに住むものたちがみていた。

朝飯は夕エ。子宝に恵まれることなく白髪を増やした夕エは、亭主とともにキイを孫のようにかわいがり、毎朝決まって握り飯を二つ、キイの家に届ける。昼飯はサヨ。大柄でえらの張った男顔には愛嬌もないが、毎朝、弁当を一つ余計につくってこそっとキイの家の上がり框に置いてゆく。手拭いでくるんだ色気のない弁当だが、時折その結び目に季節の花が差し込まれているところを見ると、案外こまやかなところもある女なのだろう。夕餉はたいてい、シンかヌイの家で。どちらも子沢山で生活はラクではないが、「八人分も九人分もたいして変わらね」と、おおらかにキイを迎え、どれが長男やら末息子やら、どれが本当の子やら他人の子やらわからぬ賑やかさで膳を囲むのであった。

そんな世話好きなものたちがいるのなら、だれかキイを引き取って育ててもよさそうなものだが——しかしこれは、母の遺言なのだ。自分が死んでもキイの人生は続く。この先キイが一人でも生きていけるよう、どうか、手を出しすぎてくださいな。

キイの母「ユキノ」は村の人々から愛されていた。

母娘がこの村にやってきたのは、キイが三つのころ。独り暮らしの老女が死んで以来十年ばかり空家になっていた粗末な家に、まるで春風がふわりと舞うように、二人はやってきた。在のものだけで肌寄せ合う小さな村に現われた、そそとした美しい母親とお頭の足らない三歳の娘。村人が鼻をつまむように扱ってもおかしくない。ところがユキノとキイは、ちょいとの間留守にしていたものが帰ってきて元の生活をはじめたように、さらりと村に溶け込んだ。だれもが二人のいる生活にわずかばかりの疑いも、おさまりの悪さも感じなかった。

思えば不思議な話である。

どこで身につけたのやらユキノにはなかなかの学があり、近所の子どもたちを集めて読み書きや算盤を教え、親子二人がどうにか食べていくのに困らない生活をしていた。もちろん貧しい村だから現金が入るわけではない。読み書きや算盤のお礼にと、あちらこちらの家から田畑の恵みが届けられるのだ。

しかしこの村では、毎日の畑仕事にも笑っていられるだけの頑強な身体か、家の仕事を手際よくこなす器用さか、どちらかがなければ生きていけない。ユキノには、どちらもなかった。

まず、煮炊きが得手でなかった。菜の刻み方一つとってみても、白魚のような手先でよくもまああんなに男勝りなと笑われるほど大雑把であったし、味のつけ具合もきのうは思わず口の周りに皺が寄るほど塩っ辛かったと思えば、今日は眉が間抜けな八の字を描くほど薄かったりと、定まることがない。

さらに、針仕事も得手でなかった。ユキノがこさえたお手玉はすぐに小豆がこぼれると評判だったし、糸の玉止めさえうまくつくることができず、縫い物をしているそばから糸が抜けていく有様だった。

よくもまあ、こんなでキイを育ててこれたなあ、人々は笑う。手で口を覆うことなく、おかまいなしに笑う。しかしだれ一人として、そんなユキノを本気で嘲る者はいない。ユキノさんはほんとにまあ――そう言いながら近寄っていくのは、だれもがユキノの美しい笑顔に触れたいからなのだ。

煮炊きが下手だと笑われようとも、針仕事が下手だと笑われようとも、そのたびに、ユキノはほろほろと美しく微笑む。ほほほ、ではない。くしゃっと下げた目尻に数本の皺をつくり、口元を隠そうとする指の隙間からきれいに揃った歯がこぼれ、下品と上品のちょうどいい加減でほろほろと微笑むのだ。人々はそんなふくよかな笑顔に癒された。その笑顔を見ただけで、なぜかしらありがたく思えた。

ユキノさんは菩薩さまだあ。

村の人々は、寝しなに、よくそう言ったものである。

みな、知っていた。いつもおおらかに、ふくよかに笑っているユキノだが、しゃんしゃんという鈴の音が遠のくと、何を置いても走って追いかけていったことを。それはユキノが娘の足首に結んだ、鈴の音。胡桃ほどもある二つの鈴の音だ。幼かったキイが痲癩を起こして泣き喚いても「泣けばいいさあ」と泣き疲れて眠るまで放っておいたユキノだが、娘を見失うことだけは断じてなかった。たとえ子どもらに読み書きを教えているときでも、たとえ近所の女たちと井戸端で愉快地笑っているときでも、耳は常に「しゃんしゃん」の距離を測り、それが遠のいていくのを感じるや、ぱたぱたとその方向に向かって走っていく。そして、やがて娘の手を引いて歌をうたいながら帰ってくるのだ。

金はかけねくても、目えはかけんとねえ。冗談のように笑いながら言うユキノだったが、本当のところ、娘の姿が見えなくなることが心配で心配で仕方ない。どこのだれとの間につくった子どもか知らないが、毎晩娘の頭を膝にのせ、その額を撫でながら歌をうたうのを何よりも幸せに思うほど我が子愛しのユキノ。娘に向ける愛の深さを、みな、知っていた。

そのユキノが、心臓を患って突然逝った。ユキノさんの忘れ形見を粗末にしちゃあいかん。だれもが思った。金はかけねくても、目えはかけてやらねばの。みな、ユキノの口癖を真似た。

お頭は足りないがユキノと同じように慈愛に満ちた笑顔、口は満足に聞けないがそれを補って余りある深い瞳――キイはキイとして、村の人々にとって愛しい存在であった。

しかしそれ以上に募る、ユキノへの思い。菩薩さまだというほどに愛したユキノへの思い。それが、かわいい忘れ形見に対する愛情へと移ったのである。

ユキノが死んでから二年の年月を経て、キイは十四になった。近所のものは三度の食事こそ面倒を見てはいたが、ユキノが遺した言葉を守り、世話を焼き過ぎないようにと逆に気をつけていた。もちろんまだ十四の娘を、それもお頭が弱く口も満足に聞けない娘を、放ったらかしにしているわけではない。粗末に扱うことなどありえず、少しばかり、いや本当を言うと少しばかりということは決してなく、口を出し、手を出したりする。キイ、起きとるか。キイ、ご飯はちゃあんと食べたか。そうしてみんながみんな口や手を出しているのだから、結局のところ、キイの生活は人々の手助けの上に成り立っているようなものだ。が、あやとりに興じているキイの傍らでキイの食べ終わった茶碗を洗ってやる、お天道様が高くなってもぐずぐずとして起き上がらないキイを叩き起こすどころか、布団の脇に投げ捨てられたキイの着物を洗ってやる――そんな世話焼きの女たちの腕をぐいと掴んで、時折いさめるものがある。

「ユキノさんに言われとろうが」

ありゃりゃあ、本当だ、つつい手を出し過ぎた。しかしその言葉とは裏腹に、だって放っておけねえだろ  
うが――が顔で出る。

「わかるがの。わかるが口や手を出し過ぎてはなんねえ。キイの人生はこれからもつづく。少しずつでも自分のことができるようにしてやるのが、おれたちの務めでないか」

キイの人生はこれからもつづく。ユキノが遺したその言葉は、過ぎるものの袖をつかむときの決り文句であった。そうだ、過ぎてはならない。口を出し過ぎてはならない。手を出し過ぎてはならない。

しかし、そんな気持ちが仇になった。

ユキノが死んで絶えずそばにいて見守ってやるものがいなくなると、キイは隙だらけになった。ユキノに似た美しい顔立ち、そしてそれ以上に抗うことを知らない幼い肉体は、よその村の勢い余る若い男たちにとって、格好の、情欲の的となったのだ。

近所のものたちが寝静まるのを見計らって、男たちは三、四人で連れ立ってやってきては、小さく口を開いてあどけない寝息を立てるキイを、いいように弄んだ。はじめこそ驚き、怯え、狂乱したキイだったが、幾度かことを重ねるうちにあきらめたのか、それとも慣れてしまったのか、成すがままになった。

なかには荒々しい営みの最中、涎を垂らして目を彷徨わせているキイの表情を気味悪がって逃げ出すものもいた。仲間がそんなキイと交わる様を目の当たりにして、「バチが当たる」と二度と来なくなるものもいた。しかし、いつの世も女であればなんでもいいという虫けらのごとき男はいるもので、天罰を恐れぬ男たちは新しい仲間を誘っては、その後も飽きることなくキイを慰みものにするのであった。

夜半のおぞましい事件に気づいたのは、隣家に住む作造という男だった。

この作造、年は二十三歳。つい半年前に嫁をもらい、キイの家の隣に空いていた土地に家を建てて夫婦で住んでいる。嫁のタキはたいそう背が高く、作造とは幼馴染みだ。いくらか大まかなところもあるが、おとなしい作造と添うには加減のいい、朗らかで気立てのいい女である。

さて小用に目覚めてごそごそと布団から這い出ると、キイの家のほうから何やら声がある。なんだ、こんな時間に。耳をそばだててみると、声だけではない。どたん、ばたんと、鈍く重い音がある。時折しゃんしゃんと鈴の暴れる音がある。ただならぬ気配を感じた作造は咄嗟に戸口のしんばり棒をつかみ、のし、のしと一歩ずつゆっくりとキイの家に向かった。板戸に耳を押しつけるまでもなかった。男たちの卑しい笑い声、下品に嘸し立てる声が重なり合うなかに、あへえ、ひやあ、というか細い女の声が混じる。声の女は、紛れもなくキイだ。

がらり、どっすん。子どもでさえ片手で開けられる板戸を、必要以上の力を込めて、作造は開いた。おめえら、なぬしとるかあ。両手で強く握ったしんばり棒は右肩高くに構えられ、今にも振り落とされんばかりである。

作造は背丈の大きな男ではない。肉づきもよくはなく、力自慢でもない。しかしそのときの目が異様なまでの光を放っていたせいか、高く掲げたしんばり棒のお陰で実寸以上の背丈を見せていたせいか、間男たちは閻魔さまにでも出くわしたかのようにうわっと逃げ出したのだった。

キイの様子がおかしいことに気づいたのは、作造からその夜の出来事を聞かされていたタキだった。翌朝話を聞いたタキは、思わず亭主に飛び掛りそうな勢いで怒った。

「なんてことするんだあ、キイに、なんてことするんだよお」

「待て、おれは助けたんだ。おれはキイを助けたんだ」

そう言う亭主は、たしかにお手柄ものである。あんた、よくまあ一人で間男どもを追っ払ったもんだ。タキは肉の薄い亭主の肩をぽんぽんと叩き、気が晴れたように台所に向かった。しかし味噌汁の実を刻みながら、ふと、いやあな思いに眉根を寄せる。もしキイが慰みものにされていたとしたら……。タキの胸にゆらゆらと立ち上った煙がどす黒い煤を含んで吐き出されるまでに、そう時間はかからなかった。

「あんた、やっぱすキイが変だ。ここんとこ飯もろくすっぽ食べてねえみたいだし、顔色もよぐね。さっきも声をかけたのに、死人みてな顔して返事もしねえ。お天道様のほう見て、ぶつぶつぶつぶつひとりごちてばかりなんだ。あれはきっと、やられたに違えねえよお」

産婆である梅婆のところにキイが連れてこられたのは、そのあくる日のこと。作造のお手柄から、ふた月ほど経った日のことであった。タキに手を引かれてやってきたキイは、飛んでいる小さな虫を追うかのように黒目をちろちろと小刻みに震わせながら、婆の前に座った。

「どれ、顔さよぐ見せろ」

皺だらけの手の平でキイの頬を乱暴に挟むと、その肌をすりすりとおでこを、目を、鼻を、あごをゆっくりと検める。そしてつぎに、脈をとる。目をつぶり、キイの右腕に押し当てた自分の短くしなった親指から、静かに静かにキイの身体の音を聴

く。最後に、やはり目をつぶったまま腹から尻へと両の手を這わせ、時折手を止めたところで何やら意味ありげにうなずいたり、首を小さくひねったりする。十本の指すべてに、研ぎ澄まされた五感があるのだろうか。十本の指すべてが、神がかり的な力を宿しているのだろうか。そう思わせる、神妙な時間だった。

おもむろに手を放し、診察が終わったことを婆は目で伝えた。婆、どうなんだ。やっばすキイは孕んでおるのか。なあ婆よ、どうなんだ。しかしタキの言葉を無情に絶ったのは、婆の苦渋に満ちた深い、深い溜息であった。

――ああ、キイよ。おめを汚した悪たれはどこのだいつじゃ。

## 四

梅婆は、村では「子消し屋」として知られていた。表向きは産婆だが、「子消し」すなわち墮胎も、婆の大事な仕事である。雪の多いこの村では、小川の水が温くなってくると悪阻の女が増える。しかし子どもを五人、六人も抱えることになれば生活は苦しいどころか成り立たず、じつは墮胎するものも少なくない。梅婆の家は、そうした村の事情から生まれ、代々続いている子消し屋なのであった。

梅婆よお、こげな商売嫌気がささんか。だれかがそう問うたとき、婆はさわさわと飯をかき込みながらこたえた。

「知らん。人が生きるも死ぬも、おれの決めることじゃねえからの」

婆がまだ婆になることも想像できずにいたころ、子消しを終え、すまし顔で茶をすすする祖母に訊ねたことがあった。

「なんでさ、なんでまだ生まれてもいねえ赤ん坊を殺すんか、ねえ、なんでさ」

そのとき祖母が湯飲みの口からもらしたのが、「知らん。人が生きるも死ぬも、おれの決めることじゃねえからの」という答えにならない答え、それでいて二の句を断じて受けつけぬ頑なな言葉であった。

いつからを代々というのかわからないが、とりあえず梅婆の知る限りでは祖母、母、そして自分へと継いできた産婆と子消し。嫌気がささんかと訊ねてきたものも一人ではなかったが、それでも産婆という表稼業はもちろんのこと、子消しという裏稼業においても、村の人々から大切にされてきたことには変わらない。皮肉なことに子宝に恵まれなかった梅婆はこの稼業を自分の代で終わりだとあきらめてはいるが、はたして、それを晴れ晴れと思っているのか、申し訳なく思っているのか、婆の胸のうちをだれも知らぬまま今に至っている。

# 五

さて、話は十四のキイの懐胎がどうやら本当であったと知れた、その三日後のこと。

「準備はできとるか。綿はしこたま用意しておくか」

まだ月が微笑んでいるうちから、梅婆のしわがれた声が響く。ここはキイの家だ。

「ああ、これぐらいあれば足りるんでないかと思うがよ」

「手拭いもたんまり持ってきてあるで」

いくどか子消しの場に立ち会ったことのある女たちが、指示されるまでもないわと言わんばかりにきびきびと立ち回っている。

「ああ、そんなもんでええ」

うなずいた梅婆は、で、と三和土のほうを見やる。

「で、屏風はまだか」

問われた女たちが婆の視線の先に目をやったときちょうど、サヨがよいしょ、よいしょと屏風を運んできた。もともと愛嬌のない男顔。狭い額から滴り落ちる汗がえらの張った頬を伝わる様は、ますます遅しく見える。

「ミヤさんちの裏にちょうどええのがあったから、拭いてきたわ。これでどうだ」

「ああ、ええ。ご苦労だったの。それを寢床の脇に逆さに立ててくれんか」

「逆さ屏風」は、子消しの習わしである。産道から出でた赤ん坊が眩しく温かい光を見るときは正屏風、しかし同じように産道から出でながらも冷たい闇を見るときは逆さ屏風が立てられる。それが、掟だ。逆さ屏風の向こうに孕んだ女がいれば、それはすなわち、墮胎を意味するのである。

部屋の真ん中に布団があり、その上に、眠り呆けたキイがいる。寝顔だけを見れば、とてもお頭の足らない娘とは思えない。お頭の足らない娘にも、男を惑わす女にも、計算高い女にも、口から火を噴くような気性の荒い女にも、神様は等しく、頬ずりしたくなるほど美しく清らかな寝顔を与えてくれるのだろうか。

キイよ、起きろ。声を殺しながらも身体の髄に響くような婆のひと言で、キイは眠りの淵を這い上がり、ぴしゃぴしゃと頬を打つ婆の手の平で、ようよう眼を開けた。

「キイよ、ちよいと辛抱しろ。これからおめの腹んなかを掃除するで。ちいと痛い思いをするだろうが、齒あ食いしばって辛抱しろ。辛抱じゃ、辛抱じゃで、わかったの、キイ」

キイの両手足は四人の女たちの強い腕っ節によって、がんじがらめになっている。ただならぬ状況に驚いてキイはカッと縁が切れそうなほど大きく目を見開いたが、手拭いで猿轡をはめられた口からは声を漏らすことができず、喉の奥から絞るうめきが手拭い越しにくぐもった音を発するばかりであった。

夢から覚めてゆくように、空は闇を剥ぎ、光を含んだ薄紫色に転じていく。その空の下でちゅんちゅんとさえずりはじめた小鳥たち。尾花村に、朝がきた。

猿轡を外された口で荒い息を繰り返しながらも、キイの肢体は絶命したかのようにぐったりと横たわっている。傍らにいるのは、梅婆ただ一人。放心した顔を天井に向け、洗っても消えない血の匂いを払うように、手拭いでごしごしと手をこすっている。女たちは朝の訪れを待たずに、婆からせかされて家に帰っていった。何事もなかったように、朝餉の支度をしなければならない。いつもと同じ朝。しかし、梅婆の小さく折りたたんだ膝の脇には、にゆるにゆるとした赤黒い肉塊があり、その肉塊を、生まれいずることを断られた命の悲しみが包み込んでいた。

紗耀寺の和尚がやってきたのは、それから二日たった深い夜のことである。

紗耀寺――。かつては近くにある巳登滝を求めて多くの修行僧が立ち寄った寺だというのが、今では子供たちが道草に訪れる呑気な山寺の風情が濃く、村人からも「しゃようじ」ではなく「さようさん」として親しまれている。修行僧の足も途絶えて久しく威厳こそなくなった寺ではあるが、独り身で慎ましく暮らす「さようさんの和尚」は、その茫洋とした温かい人柄からみなに愛されているのだ。

その和尚が、昏々と眠りつづけるキイの枕元に座り、手の平でそのおでこを優しくなでつける。身体にこもった熱をぬぐうように、いくども、いくども、なでつける。そして自分の手の平がキイの汗を吸い取っていくらか湿ってきたころ、和尚は、風呂敷包みの中から一体のこけしを取り出し、それを布団の縁に立たせた。二晩、寝るも食うも忘れて彫った、七寸ほどの背丈のこけしだ。

「キイよ、おめの赤ん坊はちゃあんと供養した。なまくら坊主のわしにしてやれるのは、そんなことくらいだからの」

ひとつ呼吸をして、和尚は言葉をつなぐ。

「赤ん坊と呼ぶにはふがない小さな塊だったども、それでもちゃあんと土をかけて花を手向けて、経を唱えさせてもらったぞ」

子消しからまるまる二日間死んだように眠りつづけ、ようよう和尚が来た日の朝、タキに支えられながら半身を起こして重湯を数口すすったキイであったが、そのあとはまた、ひたすら眠りつづけていた。時折空っぽになった子宮が痛むのか、下腹をさすりながら苦しげなうめき声を発して顔をゆがめるが、たちまち、深い眠りに入る。そんなキイを労わりながら、和尚は「このこけしにはのお」とつづける。

「このこけしにはのお、消されてしもうた子おの魂が宿っておるんじゃ。ほっこり笑っちょるような顔をしないと、本当は泣いておるんよ。うんにゃ、泣き笑いをしておるんよ。いっぺんもおっかさんの顔を見ることのできなかった子おが、こけしの姿を借りて、やっとおっかさんに会えた。それが嬉しゅうて、でもそんな姿でしかおっかさんに会えなかったことを思うと悲しゅうて、半分笑って半分泣いておるんよ。

おめは、お頭が足らぬ、言葉も知らぬ、そのうえおっかさんを早うに亡くしてしもうた。だども、そんなおめでも、おっかさんの温もりを知っておろうが。おっかさんに愛された、それだけで十分に、生まれてきた意味があるだろうが。

キイよ、なんにもわからずに子消しの罪を負ってしもうたおめも不憫だが、おっかさんに抱かれたことのないまま消されてしもうた子おを思うと、わしは悲しゅうて悲しゅうてならん。

おめが心の底から愛しいと思う男の子おであったら、梅婆も屏風を逆さにはせんじゃったろう。村のかかあどもも我が子、我が孫のように育ててくれたじゃろう。たとえ、父親と名乗りを上げる男が居らんでもな。

この先、おめが読み書きができるようになるとは思えん。ましてや金を稼いで一人で生きていけるようになるとは思えん。だども、せめて、せめて男を愛しいと思う心が芽生えて、その男の子おを産みてえ、その男の子おを抱っこしてやりてえと思う心でいっぱいになって……おめが、女子として生まれてきたおめが、せめてそんな程度の幸せを求めようになってくれたらと、わしは思う。おめが愛しいと思った男、おめが愛しいと思った子お。そうであったら、わしらもどんなに救われることじゃろうて。

いまさら拉致もない話じゃが、おめの足りないお頭を、今日こそ不憫に思ったことはない。今日こそ悔しく思ったことはない。ああ、キイよ。ああ、いやいや、ユキノさんよ。このめんごい娘に、男や子おを愛しく思う心を与えてやってくださらんか。ちいとでいい、このめんごい娘に、女子としての幸せをわからせてやってくださらんか。じゃないと、わしの彫る下手なこけしも浮かばれん。泣き笑いのこけしを何体彫っても、キイは幸せになれん。

逝ってしまったお人に願い事をするのは坊主としてけしからんことだとわかっておるが、それでもわしは、あんたの御心にすがらずにおれんのじゃ。ああユキノさんよ、どうか、どうか、西の空からキイに温かい光を届けてくださらんか」

枯枝のような手でキイの頬をまあるく包むと、和尚は閉じた瞼の縁に涙をにじませた。それからふと、持ってきたこけしに向かって居住まいを正すと、両手を合わせてもごもごと口の中で経を唱えたのであった。

## 六

夜を、どうするかじゃ。

あの一件以来、村人たちはキイの身边に目を光らせるようになった。子消しは大方がまだ目を開けぬうちに行なわれたが、だからといって人々が知らないわけではない。みな、知っていた、案じていた。いつもと同じように朝餉をとり、畑に出て土を触りお天道様を浴び、そしてやがて、それぞれの家に戻る。繰り返し、繰り返し行なってきた日常をなぞる。しかし、夕餉を済ましたころにぼそぼそと湧いてくるのが、キイのことをどうしようかという話だった。

昼間はたいてい、キイはだれかしら目の届くところにいるし、昼日向から押し入るような間抜けもいまい。心配なのは、夜だ。人々は話し合って、キイを順番に泊ませることにした。それならキイも寝込みを襲われる心配はないだろう。しかし五日と経たないうちに、これもいい策ではあるまいということになった。他所で寝ると、キイは寝床でぐずったり漏らしたりしてしまうのだ。

これは困りものだと、次の策を練る。そうだ、キイの家の戸に錠をかけりゃあいいでないか。とっくに思いついてもよさそうなものだが、用心の要らぬ尾花村に、錠をかける習慣はなかったのだ。

そりゃいいわと、人々は一様にうなづく。ただし錠番が必要だろう。これには、作造とタキの夫婦が当てられ、二人は毎晩キイが寝ついたのを確かめて錠をかけることが日課となった。あの忌まわしい出来事を目の当たりにしてしまった作造は、自ら錠をしてもなお気がかりでならず、布団に入ってからもしばしば抜け出してキイの様子を見に行かずにいられなかった。あんたあ、もう心配いらんよ。タキにそう言われても、錠番となったからその分だけ、責任を感じる。責任を感じれば、否が応にも不安が波打つ。作造の落ち着かぬ夜は、ひと月、ふた月ほどつづいただろうか。

それでも、朝が来ない夜はない。春が来ない冬もない。キイ、十六歳。あの傷みから二年の年月を経て、村にも、キイにも、萌黄色の季節がやってきた。

足りないお頭は相変わらずが、小さな子どもが転んで膝小僧を擦りむけば走りよって手当てをしてやる、忙しそうにしている女を見ればその背におぶわれている赤ん坊に両手を差し出し、すすんで子守りを引き受けるといった具合に、キイはユキノが死んだばかりのころとは見違えるほどの姉さんぶりをみせるようになっていた。

身の回りのことも、少しずつ一人でこなすようになった。火を使うことだけはさせられぬと、飯は近くに住むソデという若い女房が――これは腰の弱ったタエに代わって受け持つことになったものだが――朝夕二回お櫃に入れて届け、汁や煮物、焼いた干し魚などは近くのもの差し入れたりする。申し合わせたようにみなが差し入れをする日もあり、そんなときは孤食の膳が宴のように華やいで、図らずともキイを困惑させたりするのであった。こうして足らぬことを知らぬキイの膳ではあったが、それでも自分で飯をよそうことを覚えたし、日持ちのす

る惣菜などは水屋にしまっておいて少しずつ食べる知恵もついた。洗濯や茶碗を洗ったりすることに関しては、ユキノさんより器用でないかと妙な誉め方をされるほど上手だった。

のろのろとではあるが、キイは、生きることを身体で学びはじめたのだ。

あの忌まわしい出来事についてはだれも語らない。キイが元気に成長してさえくれれば、それでいい。みな、口に糊してキイの幸せだけを想うようにしていた。

# 七

ゆるやかな月日の流れは、ときとして大きな油断を生む。

小さな子どもたちの遊び相手をしていたはずのキイが何度か姿を消していたことに、だれも気づいていなかった。足首の鈴の音が時折遠のいていたことに、だれも気づいていなかった。

キイの様子がおかしいことに気づいたのはソデだった。朝、いつものように飯を届けに行ったソデは、上がり框に腰掛けてちよいと油を売った。生来朗らかで話好きのこの女は、キイがわかっているのかわかっていないのかお構いなしに、天気のこと、気の弱い亭主のこと、畑で採れた大根や芋の出来具合など、毎朝とりとめのない話をしていく。その日も同じようにおしゃべりをつづけていたソデだったが、お櫃を開けて炊き上がったばかりの飯をよそおうとしたキイが、うげっと口を押さえたのを見て驚いた。

どうすた、キイ。お櫃に虫でも入っているのかと開けっ放しになっていたお櫃の中をのぞいてみたが、ほわほわとした湯気の向こうには白く光る飯しか見えない。

「なんだよお、キイ、なんにもへえってねえじゃねえか。うまそに炊けてるぞ、さあ湯気が消える前に食っちゃまえ」

それでもキイは手で口を押さえたまま、いやいやを繰り返す。

「しょうがねえな。じゃあおれがよそってやっから」

キイが涙目になっているのにも気づかず、その手から茶碗と杓文字を取り上げて飯をよそうと、ソデは、はいよと、顔の前まで押しつけるように差し出した。するとキイはさっきよりも大きくうげっと苦しげな声を出し、厠に走っていくではないか。開け放たれた戸口の向こうに蹲っている細い背中を見やりながら、ソデは、それでもまだ呑気である。どうすた、キイ。気分でもよぐねえのか、風邪でもひいたのか。しかし近寄って苦しそうに吐瀉を繰り返すキイの背中をさすっているうちに、ようやく、はっと思い当たった。――おめ、もすかしてまた孕んだのか。

青白い顔をして伏せているキイのところに梅婆がやってきたのは、翌々日のことだった。

再びの事態に備えて、夜もとっぷり暮れた時刻。キイの布団を囲んで、梅婆と四人の女がいる。タキ、サヨ、リン、フキ。タキを除けば、前の子消しに立ち会ったものばかりだ。

「間違えねえな」

梅婆の言葉が、女たちの心に深く沈んでゆく。

「また、逆さ屏風か」

溜息を漏らすようにそう言ったのは、四人の女たちのうちの、だれであったか。

「ほかにどうする」

婆のそのひと言がはじまりの合図となり、女たちはのろのろと腰を上げた。しかし、だれも目を合わそうとしない。

はじめての子消しの日、女たちはみな怒っていた。だれじゃ、キイをこんな目に合わせたのは。どこの罰当たりじゃ、こんな酷いことをしたのは。亭主たちに言って、片っ端から怪しいやつをとっつかまえてやるか。でもって、八つ裂きにしてやるか。湯を沸かし、屏風を逆さに立て、キイの着替えを用意しながら、口は絶えず泡を飛ばしていた。

しかし二度目となったこの日はみな、互いに目を合わさず、言葉も発しない。一度目のときと同じように子消しの準備をしているが、顔に、表情がない、動きに、血の流れがない。ふとこみ上げる怒りも、いったいだれにぶつけていいかわからない。ふと口元からこぼれる祈りも、いったいだれに捧げていいかわからない。どんよりとした墨色の夢、色も匂いもない空ろな世界。時折だれかしらが漏らす溜息も、掬われることないまま澱んだ空気に吸い取られていくのであった。

日中いく度も襲ってくる激しい悪阻に疲れて、ぐったりと寝入っているキイ。その布団の周りで、支度が整った。

「行くぞ。ええの」

返事がない。

婆が、ええの、と念を押すように四人の顔を見回したとき、うつむいたサヨがぼつりと漏らした。

「ユキノさんに申し訳が立たねえのお」

澱んだ空気が集まって雲をつくり、そこからぽつぽつと雨が降りはじめた。しくしくと大粒の雨が、タキの目から、リンの目から。そして「申し訳が立たねえ」と言ったサヨの愛嬌のない顔からも、ぽつとんと一粒の雨が落ちたとき、それを手首に受けたキイの瞼が気だるそうに開いた。ぼんやり見わたせば、不安そうに泣く女たちの顔が四方ある。気がつく、手足ががんじがらめになっている。

しかしキイが怯えて手足をばたつかせるより早く、梅婆の強い声が響いた。

「しゃんとせえ」

ひっと、雨がやむ。すかさず、婆はキイの腹に右手を押し入れたのであった。

それから三日目の夜半。キイの枕元で、二体目のこけしが泣き笑う。やっとおっかさんに会えた笑い、こんな姿でしか会えなかったと泣き…。しかしその三日月のようなほっそりと美しい目は、ぐったりと伏せているおっかさんの命をひたすら案じているようにも見えるのだった。

# 八

湿り気を含んだ空気が、ねちっこく肌にまとわりつく。少しは隠れておればいいものと思うくらいに、お天道様が笑う。時折申し訳なさそうに流れてくる風がどこからともなく風鈴の音を運んでくるが、それとて、涼をとるにはあまりに頼りない。

尾花村の、夏の残り。働きもので朗らかな村の人々ではあるが、雨の恵みを得ないこの夏はさすがに身体に堪え、その上、キイの容態がすぐれぬこともあって鬱々とした日がつづいている。

二度目の子消しとあって、キイの身体はなかなか回復しなかった。子どもから女になろうという大事なときに、二度までも傷を負ってしまった。まだ背が伸び、肉がつこうとしている年頃じゃ、無理もあるめえよと、梅婆は言う。その通りだ。腹の中で新しい命を育む準備などできていないのに、ましてやそれを十月十日待たぬうちに掻き出すことなど、身体に障らないわけがない。子消しのあとまるまる三日間高い熱がつづき、とろんとさえ瞼を開けようとしなかったのも、当然のことだろう。

いつときは生死の境をさまよっているかに見えたキイだったが、五日ばかりしてようやく、重湯を飲めるようになった。人の手を借りてではあるが、半身を起こし、運ばれた匙にそろりそろりと口をつける。喉の奥から、こくりと重湯を飲む音。それを聞いた女たちが、子どものように手を叩いてはしゃぐ。上がり框から首を伸ばして心配げに様子を見ていた子どもたちが、一気に晴れた顔を合わせたかと思ったら、弾かれたように外に飛び出す。

「キイが重湯を食ったぞおおおお」

それを聞いた女がすっ転びそうになりながら畑に走り、同じように叫ぶ。

「キイが重湯を食ったぞおおおお」

するとそれを聞いた男が鍬を放り出して梅婆の家まで二十町の道のりを走り、息を整える間もなく婆に告げる。

「婆、キイが、キイが――」

「なに、キイがどうすた」

「キイがよ、キイが重湯さ食ったんだとお」

男の言葉を受け止めようと身構えた梅婆だったが、それがいい知らせとわかって、へたへたと顔の筋肉を緩める。

――そおか、重湯を飲んだか。ああそおか、そおか。

ああキイよ、おめ、救われたんだのお。

秋の衣をまといはじめた山の向こうに、うっすらと虹がかかる。それはまるでユキノがほろほろと微笑んでいるような、温かく、拝みたくなるような光の束であった。

床上げしてもなお食が細く、近くに住む女たちがかいがいしく身の周りの世話をしてくれるのに任せて、時も、音も、香りも、お天道様の光さえも忘れ去ったような日々を送っていたもの

だが、秋を過ぎ、長い冬を越えるころになると、キイの頬は紅を差したように染まり、肩や腰の辺りにも年頃を感じさせるようなふくらみを帯びてきた。最近では村人たちが働く田畑の脇にちょこんと腰をおろし、うっすらと穏やかな笑みを浮かべたりしていることもある。雪のつづいたせいもあるだろうが、人々は日がな家に閉じこもっているキイを心配し、哀れに思っていた。だからこそ、キイが元気になっていくさまを見れば嬉しくてならない。これ食べ、あれも食べと、畑で採れたものを煮たり焼いたりしては届ける。こんな花が咲いていたぞと、道ばたの名も知らぬ草花を摘んでは届ける。少しでも元気になってほしいから、みな、一生懸命だ。けれどもそうすることは同時に、人々の心を元気にしていた。人々から早く元気になるよう願いをかけられていたキイ。そんなキイを思いやることで自らの心を肥やしていた人々。結局、お互いさまなのだ。

そういえばこの「お互いさま」という言葉、亡きユキノがよく口にしていたものである。たとえば赤ん坊の子守り、病に伏せている年寄りの世話など、頼まれれば喜んで引き受けるユキノであったが、「ありがとねえ」「すまねえのお」と言われるたびに、ほろほろと笑いながら返した。「なあんの、お互いさまだわよお」。どういたしまして――とは、言わない人だった。

## 九

山々が、青葉で茂る。その足元に広がる稲田が、光を吸っては吐き出しながら、青々と揺れる。小川で水と戯れる子どもたち、きらきりと汗をしたたらせて働く男たち、女たち。二度目の子消しから二年、尾花村は生きる力を取り戻していた。

働き、笑い、生きる――そうした人々の営みがお天道様の光を集め、雨を降らし、緑を茂らすのか。それとも照り、降り、そよぎ――そうした自然の営みがお天道様の命に肥やしを与えるのか。どちらだろう。もちろん理屈で言うなら、自然が人を生かしている。けれどもこのところの尾花村を見ていると、人々の元気な笑顔がお天道様を笑わせているのではないかと、そうも思えた。

タキがはじめての子を生んだのは、その年の二月のこと。亭主の作造に似たのか肉づきがいいとはいえない華奢な赤ん坊であったが、産声は山を震わせるほど元気がよく、これはおっかあに似たんだらうよと、かつてタキを取り上げた梅婆が笑う。正屏風の脇で床に臥したタキが、うんうんとわずかにうなずきながら笑う。そんな女房と勢いよく泣く赤ん坊に挟まれた畳の上で、作造が顔をくしゃくしゃにして笑う。手伝いにきていた女たちの顔にも満面の笑みがこぼれ、またその笑みのおこぼれを頂戴した村人たちの顔にも喜色があふれ、村中が新しい命の恵みに華やいだ。

ユキノが亡くなってからしばらくの間キイを家に呼んで夕餉を食べさせていたシンの一番上の娘が、山向こうの男のもとに嫁いだ。キイと同じ歳のこの娘は、いつか、毎晩のように自分の家で飯を食べ、母親が我が子のようにキイに接するのを不満に思っていた。

なんでキイがここにおるんだ、なんでキイはうちの子みたいな顔しとるんか。じつを言えば、隣に座って飯を食べるキイの太ももをチクツとつねったこともある。母親がヨソを向いている隙に、キイの味噌汁に唾を吐きかけてやったこともある。そんな娘が、嫁ぐ日の前の晩にキイの家を訪ねたことなど、だれも知らない。

「すまねかったの、キイ。堪忍してくれよ、キイ。おれは明日、嫁さ行く。こんな意地の悪いおれでも嫁さ行くんだから、おめはもっと幸せになんきゃいけねえのよ。もう悪い男に弄ばれんように、なっ、キイよ、おめはおめで、ちゃあんと幸せになってくれ」

娘の嫁入りは、八つ川のほとりの桜がほっこりと蕾を膨らませはじめたころ。村では三年ぶりの嫁入りとあって、祝いを述べる人々が行列をつくってその後ろ姿を見送ったのであった。

それからひと月も経たぬころ、サヨのもとに、町の学校で勉強をしていた長男が帰ってきた。これからは尾花村の田畑をもっと豊かにするんだとたくさんの知識を身につけて戻ってきた息子を、サヨは錦の旗を振って迎えた。息子が帰ってきたでよお、もうなあんも心配いらん。あんとんところも、なにか困ったことがあったらうちの息子に聞いてみりゃええわ。人を見つけてはとっつかまえて息子を自慢するサヨ。愛嬌のないえらの張った男顔に、八重の桜が咲き匂う。日ごろの仏頂面の理由を知っていた村人たちは、そんなサヨを温かく包み込む。そうか、そうか、よかったのお。孝行息子が帰ってきて、本当によかったのお。

タキの出産、シンの娘の嫁入り、サヨの息子の帰郷と、めでたいことづくしの尾花村。その上、豊作である。笑顔は絶えることがない。

無論、だれもがキイのことをないがしろにしていたわけではない。が、村人の関心はめでたいほうに向く。雨の後だからなおさら、晴れが嬉しい。晴れ空の下で水溜りがどんどん小さくなり、やがてぬかるんだ土がすっかり乾いてしまえば、そこに水溜りがあったことさえ、忘れてしまうのだ。

ちょうどそんなころだった。尾花村の水溜りがすっかり乾いたころだった。

あちらこちらの祝い事に人々の心が弾んでいるころ、キイはいく度か村外れまで出かけていた。用があるわけでは、もちろんない。ただただ、お天道様の光に導かれるまま、風に背中を押されるまま、ふわりふわりと足が覚えている道のりを歩いていただけのことだ。

しかし村人に気づかれることもないまま小僧橋の半ばまで歩いてきたキイは、そこで、一人の男と出会うことになる。

# 十

男は二十五歳。名を清順という。

作家を志して名のある師のもとで書生をしていたが、師の女房と邪な関係に陥り、刃物沙汰になったところをほうほうの態で逃げ出した。その後、それでも筆を折ることができぬまま知り合いの家を転々としながら小説を書きつづけていたが、ついに金も、宿も、それらを呈してくれる知り合いも尽き、彷徨うように歩いているうちに、とうとうここまでやってきてしまった。

こんな人生に、何の意味があろう。私など、生きていて何の意味があろう。清順は、小僧橋から眼下の川を見つめながら、ふっと、死を思った。あの川の流れに身を任せてしまえば、流れついたところで生まれ変わることができるかもしれない。そうだ、死んで、生まれ変わればいいのだ。そう思うと、気持ちがすうっと楽になった。

実を言えば、水が豊かな季節でさえ溺れるほど深い川ではない。ところどころ岩が顔を出しているのだ、橋の高さはほどほどにあるから身を投げれば岩か川底に頭を打ちつけて命を落とすだろうが、その身が流されていくことなど到底ありえない。しかし川に身を投げ、流れに身をゆだねれば楽になれる。そう思うと、苦悩を繰り返していたことが嘘のように、身も、心も、重たい鎖から解き放たれた。

何ものかにいざなわれるかのように、右手が、そして左手が、橋をつかむ。その手に力が込められたのを確かめてから右足を橋にかけたそのとき、清順の目の端に、女が映った。キイである。

白い綿衣を着たキイは、日の光を浴びてぼんやりと発光していた。

蚕みたいだ。

と、清順は思った。

今まさに川に飛び込もうとしているときに、「蚕みたいだ」もないものだ。けれども清順は、幼いころに一度だけ見たことのある蚕の柔らかく、透き通っているようで透き通っていない青味がかかった白い姿を思った。橋を握った手から、橋にかけた右足から、血の気が引いたように力が萎えてゆく。しかしその一方で、くすんでいた瞳はにわかに光を取り戻し、キイを捉えて放さない。

キイはといえば、遠くの山々に向かってゆらゆらと目を泳がせていたが、ふっと清順の視線を感じて、べこ人形のようにおぼつかない首を回した。十歩、二十歩ほど先に、男がいる。こっちを見ている。何を思ったのか、キイは胸元に抱いていた夏草をじっと見る。ここにくる途中で摘んだものだ。じっとそれを見つめてからおもむろに首を上げ、男を見る。そしてまた、胸元の夏草を見る。幾度かそんなしぐさを繰り返したかと思ったら、そろそろと、やがてぱたぱたと、清順に向かって走り出した。走るというほどの距離ではない。その足は五つ数えるまでもなく清順の前で止まる。清順の顔の前に突き出された、あどけない笑みと、ひと束の夏草。

——なんとまあ、美しい蚕だろう。

橋にかけた清順の右足はゆっくりと地面に戻り、両手は橋から放れてキイを迎える。

――ああ、なんと美しい女だろう。

命を投げ出そうとしていた清順の目に、涙の溜まりができる。そして、落水。堰を切ったように目の縁からこぼれた涙は、清順の頬をつたって滝となる。ついに堪えきれず、清順はわっと泣き伏してキイの足首を抱いた。嗚咽しながら、彼は言った。

「私は今、この川に身を沈めようとしていました。生まれ変わることができるなら、今ここにある命に何の未練もないと、そう思えばこそ、この橋に手をかけていたのです。今さら引き返そうとは思いません。残す心などありません。おめおめと帰る場所など、いったいどこにありましょう」

しゃくりあげ、涙に誘われた鼻水がだらだらと流れる。それを拭おうともせず、清順は、キイの足首にしがみついた清順は、嗚咽の隙間に言葉を続けた。

「でも、どうか死ぬ前に。お願いします、どうかこの命を絶つ前に、あなたを、あなたをこの手で抱かせてはもらえないでしょうか。私の穢れを、あなたのすべらかな肌で洗い浄めてはもらえないでしょうか。それから私は死出の旅に出ます。それから私は生まれ変わります。だからどうか、どうかお願いします、死の淵に立った私の魂をお救いください」

足りないお頭をのせた首を折り、不思議そうに足元の清順を見つめているキイ。清順が抱きついてきた拍子に、手にしていた夏草はぽとりと落ちた。空になった手は、清順の頭をなでつけようとしてそのそばまで伸びるが、ふと思いとどまって、空をつかむような動きを見せている。

どれくらい、そこで涙を落としたろうか。ふっと我を取り戻したかのようにぐしゃぐしゃの顔を上げると、清順は立ち上がり、キイを抱きかかえた。そして橋の下の茂みに隠れ、こともあろうか、キイを犯したのだった。

山に沈みかけたお天道様が、仰向けに寝そべったキイの横顔を照らす。愛しそうにそれを見つめる清順。その左手はキイの右手をやさしく握り、左手はキイの汗ばんだおでこにかかる前髪をそっとなでつけている。ふっと、叢に寝かした首を回して清順を見つめ返すキイの目は、ほろほろと笑うユキノの、あの目だった。

しかし、己を消し去ろうと思うほどぎりぎりまで追い詰められていたかに見えた男の心は、これほどまでに軽いものであったのか。キイを抱いた清順は、闇のなかで一筋の光を見た。そして一度ならず、再び、三度と村人の目をかすめてはキイを誘い出してその身を貪るうちに、清順は、薄皮を一枚一枚剥ぐように絶望を忘れていった。

「ありがとう。お前のお陰で私は迷いを絶つことができた」

息を吹き返した口が、そんなことを言う。お前？　なんと美しい人だろうと、拝むほどに求めた女ではなかったか。迷い？　残す心などありませんと泣きじゃくったのではなかったか。

そういえばまだ名も聞いていなかったが――しかし逡巡するかのような態度を見せたのも束

の間、すぐにあごをぐいと引き締め、清順は言った。

「私は明日、この村を出る。もう一度やり直してみようと、心に決めた。ありがとう。どうかお前も幸せに暮らしてほしい」

傍らにすくっと立って、遠くを見やる清順の目。足元でほろほろと微笑む女ではなく、遠くに光っている明日を見つめる清順の目。男が去っていくのを察しているのか、その不安をかき消そうとしているのか、キイは尻をついたあたりの夏草を摘んで、その手をまっすぐ、清順の方へと差し出すのであった。

せめて、名前ぐらい聞いてやってくれてもよかっただろうに。

もちろん、名前を尋ねられたところでこたえられるキイではない。それでも、せめて名前ぐらい聞いてやってくれてもよかっただろうに――。

年をまたいで、春。小僧橋の真ん中より十歩、二十歩ばかり尾花村に下がったあたりに、十八歳のキイがいた。

透けそうなほど白い顔は、淡い紫色のワンピースを着た細い身体の花芯のようにちょこんとおさまり、薄い肩から羽織った白いカーディガンがひらひらと風に揺れて、盛りを過ぎた花卉のようにいつ飛んでゆくかわからない頼りなさである。ぼんやりと遠くを見やる瞳。うっすらと青みを帯びた白目に縁どられてくっきりと際立つ瞳ではあるが、怯える小鳥のように小刻みに震えて焦点が定まらず、細いあごが突き出した方向をたどってみても、そこには夕陽を背負った深山が広がるばかりであった。

「キイはまた孕んだんでねえのか」

町まで野菜を売りに行っていた男が、橋に佇むキイの姿を見て慌てて女房に伝えた。あくる朝、女たちが寄り集まった。梅婆に知らせねばなるまい。

庭先で近所の子どもの相手をしていた梅婆。はじめての子消しから四年の月日を経て、その足腰には往年のかくしゃくとしたさまがない。婆にお産の面倒を見てもらうのはもう無理かもしれんのお。そうささやくものもいたが、しかしこんなときにはやはり、梅婆しかない。明日、連れて来いと、婆は言った。そして約束どおり連れてこられたキイに向かって、婆は厳しく命じた。

キイよ、そこ座れ。

キイよ、顔さよぐ見せてみる。

付き添ってきたタキは、梅婆が以前と変わらぬかくしゃくとしたさまを見せるのに、少しばかり安堵した。ああ、婆がいてくれてよかった。けれどもキイの腹の出具合から、今度ばかりはちいと厄介じゃとタキも、他の女たちも思っていたし、何より婆の曇った顔色を見るうちに、タキの心はみるみるうちにしぼんでいく。

「診るまでもないわ」と、梅婆。

「これ以上ときが経つとますます厄介じゃ。いますぐやるから、タキ、隣のスエ婆を呼んでこい。ずいぶん耳は遠くなつとるが、あれでも昔はおれの仕事を手伝っておった。役には立つだろう」

タキの背中で、一歳になったばかりの娘がすやすやと寝息を立てている。いつムズがりだすか気が気でないが、今さら帰ると言えたものではない。頼みのスエ婆を呼びにいつかはみたものの、用件が伝わるまでに何度も大きな声を張り上げなければならぬほど耳が遠いのを知れば、自分にのしかかったものの重さを感じずにいられない。

ふん、と鼻から吐き出された大きな息一つ。タキは覚悟を決めて、背中の赤ん坊をぼんぼんと叩いた。いいか、いい子でいてくれよ。おっかあはこれから大仕事じゃ。

あたふたとしながらも子消しの準備が整った。湯も沸いた。手拭いもたんまりある。そして屏風も、逆さに立てられた。婆は祈る。ユキノさんよ、見守っとくれ。

そのころキイの家の近所には、早くもキイの急な子消しが伝えられていた。梅婆のもとにキイを連れて行くことも、その理由も、みな知っている。なかなか戻らなければ、家人も近所の女たちも心配するだろう。そう思ったタキは、子消しの準備に取りかかるより早く、伝言をスエ婆の息子である五平に託したのだった。ちょうど町まで用を足しにいくところであった五平は、寄り道を急ぎ、作造がいる畑に向かった。五平のただならぬ様子に気づいた女たちが、少し離れた畑からざわざわと寄ってくる。

「ああ、やっばすそうだか」

「でも、その日のうちにか」

「そら、よっぼど急がねばなんねえほどなんだろうなあ」

「すっかすキイは、キイは大丈夫なんだろうか」

キイが孕んだことは間違いないと思っていたが、それでもこんなに急ぎことになるとは一。目に見えるほど腹が出はじめているころになって、三度目の子消し。それも、診せにいったその日のうちにとり行うという。これは相当に深刻だと思わざるを得ない。

――ああユキノさん、見守ってくれよ。

梅婆が祈っているちょうどそのころ、村人たちも空を見上げて手を合わせていたのであった。

さて、梅婆のところでは、いよいよ子消しがはじまろうとしていた。

「キイよ、めんごいキイよ。また、おめのお腹んなか掃除することになった。かわいそうにみな気がつかんかったから、赤ん坊はもう七ヶ月ぐらいになっとる。今度ばかりはちょっと掻き出すくらいの掃除ではすまん。目も口もある赤ん坊を流すんじゃ。おめの命にも障る大掃除よ。でも、おめは助ける。子おを流しても、おめは助ける。だから、どんなに辛くても辛抱しろ。ええか、辛抱して、ふんばって、生きることだけ考えろ。わかったの、キイよ」

キイの股座をこじ開けるように座っている婆。その目にじんわりと涙が浮かぶ。と、その時、キイがぐいっと半身を起こした。慌てて押さえようとするタキとスエ婆の手を振り払って、ぐいっと半身を起こした。その必死の形相に、思わずたじろぐ梅婆。これ、キイ、辛抱しろと言うとろうが。しかしキイは、目に涙を浮かべながら、いやいやと首を振る。そうはいがねえと婆が言っても、キイは激しく首を振っていやいやを繰り返す。

――おめ、わかっとなるのか。

――わかっとなるよお。

――おめ、足りないお頭でも、しっかりいやと言っておるのか。

――そうだ。おれ、お頭は足りないけども、わかっとなるのよお。

おれ、この子を産みてえのよお。あん人の子おを、産みてえのよお。

キイの声が、聴こえる。聴こえるはずのないキイの言葉が、梅婆の胸に届く。そばにいるタキにも、スエ婆にも、二人の言葉は見えない。キイと梅婆はまるで魂のかけらを交換し合うかのように、互いの間にある空気を震わせていた。

七ヶ月にもなった赤ん坊を、婆は、流すつもりでいた。もはや掻き出すのは無理だろう。ならば手荒ではあるが、流すよりほかに手立てはあるまい。タキに持ってこさせた重い漬け物石をキイの腹に置き、赤ん坊が息の根を絶つのを待つ。残忍だが、こうするしかあるまい。もちろん、長い子消し屋稼業においても、ここまで育った赤ん坊を無理矢理流した経験などない。母親の腹を膨らませるほど育ち、おそらく目も鼻も口も判別できるほど形になった命を始末するのは、さすがに身震いするほど恐ろしい。形を成していないぐにゃぐにゃの肉塊も命を宿していることに変わりはないが、それでも婆とて人の子、形を成した命を始末するのは、砕けた腰を抱えてでもその場から逃げ去りたいほど恐ろしい。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……。婆が経を唱えたのは、七十余年の人生で恐らくはじめてのことだろう。

そんな身と心を奮い立たせて、婆はキイの、三度目の子消しをしようとしていた。親もいない、お頭も足りない十八の娘に、赤ん坊を産ませてはならぬ。ましてや弄ばれた末の不幸な赤ん坊を産ませてはならぬと、婆は、鬼になるつもりでいたのだ。

しかし、産みたいのよおと、キイが叫ぶ。あん人の子おを産みたいのよおと、キイの魂が叫ぶ。

キイの両手を右左から押さえるタキとスエ婆。股座で構える梅婆。そしてその傍らで、出番を待つ漬け物石ひとつ。どうすたのかと、手伝いの二人が婆の顔を見る。強張った顔の婆と、激しく首を振っていやいやを繰り返すキイ。婆、早よお石を乗せねば。なあ婆よ、どうすたんだ。

――もしや、おめ、惚れたんか。腹の赤ん坊の父親に、おめ、惚れとったんか。

身体をしばりつけていた太く丈夫な縄紐がするすると解かれたように、しゃんとしていた梅婆の身体から力が消えていく。

――ああ、おめは、おめは惚れとったんだかああ。

キイは、力をなくしてますます小さくしぼんだ梅婆の肩を力いっぱい抱いた。わんわんと泣きじゃくりながら婆の肩を抱き、汗と涙でぐじゅぐじゅになった顔を婆の頬に押しつけた。

――婆よお、梅婆よお。おれは産みてえんだ、あん人の子おを、おれは産みてえんだあ。

## 十二

キイが五平に背負われて帰ってきたのは、それから十日ばかり経ってからであったか。明日返すぞ、という婆の言葉が伝わっていたから、隣近所のものたちはみな、そわそわしている。

タキが帰ってきたのにキイは帰ってこない。塩梅がよくないから、しばらく婆の家で預かるのだという。ああ、ユキノさんがお迎えにきたんじゃないだろうか。一人残されて、三度もひどい目にあってしまった娘を不憫に思い、いよいよユキノさんがお迎えにきたんじゃないだろうか。口にこそ出さないが、みな、そんな不吉な想いをめぐらしては、めっそうなことをとかぶりを振る。だからこそ、キイが人に背負われてでも帰ってくるらしいと聞いて嬉しくてならず、仕事も手につかないでいるのだ。

いよいよ五平の姿が見えた。近寄って行って抱きつきたいのは山々だが、あんまり騒いでキイを驚かせてもよくない。家の前で迎えたのは、タキとサヨ、ソデの三人だけで、ほかのものは少し離れたところから首を伸ばしてキイの帰りを確かめ、両手を胸に抱いたまま、うんうんと、声もなくうなずいている。よかったなあ、キイ、ほんとによかったなあ。

やつれて肉もそげたキイとはいえ、それを背負って二十町の道のりを歩いてきた五平の首筋にはさすがに汗が滴っている。まあまあ五平さんよ、お疲れだったなあ。さあ、中に布団を敷いておいたから、そこにキイを寝かしとくれ。サヨにいざなわれて畳の部屋に上がると、五平は布団の脇でようやく膝をつき、ぼんぼんと、背中のキイをたたいた。キイ、おめの家についたぞ。

と、そのときだった。それまでぐったりと五平の背に身をまかせっきりだったキイが、ゆるゆると首を起こしてあたりを見わたす。ふっと、ちろちろと泳いでいた目が動きを止める。視線の先に、一体のこけし。紗耀寺の和尚が彫った、三つ目の、赤ん坊ほどの背丈のこけしである。

ああ～、ああ～。

何を言いたいのか、キイの言葉はさっぱりわからない。その手が五平の肩から離れて一心にこけしを求めているのを見ても、キイが何をしたいのかさっぱりわからない。みな目を見合わせる中、足までばたつかせるキイを扱いかねた五平が、首を傾げながらとりあえず布団におろそうとした。

こら、キイ、おとなしく布団に入れって。しかしそう止める間もなく、ずるずると畳に身を這わせ、一目散にこけしのもとに近寄ると、キイはそれを両手で抱きしめた。抱きしめて、頬擦りをした。ぎゅっと閉じられた目の縁から、ぼろぼろぼろぼろ涙があふれてくる。

あああ～、おえおあああんおお～。

和尚の手で赤と黄の着物柄まで描かれたこけしは、キイにきつく抱きしめられたまま目を三日月にほころばせている。しかし愛くるしいその顔も、キイの涙を吸って、汚く濡れそぼっていく。

タキも、サヨも、ソデも、そして五平も、そのさまを見てかたまつた。

—おめ、ユキノさんか？

まさか。しかしそう思えるほどに、キイの、こけしを愛でる柔らかな表情が、ユキノにそっくりだったのだ。

# 十三

八重桜の衣をまもって誇らしげな表情を見せる山々。麓に広がる畑には菜の花が咲き乱れ、背負った桜色と描く二段の様子が美しい。この季節は、起きた端から心が弾む。なんとはなしに、心が躍る。帰ってきたキイがこけしを抱いて泣いたことにみな驚き、その顔がユキノに生き写しであったと聞いてまた驚き、中には信心深く空に向かって手を合わせたものもいたが、日が暮れてキイがすっかり落ち着き、こけしを抱いたままぐっすり寝ついたというので、みなもやっと安心した。

「なあんにしてもめでたいことだ」

「そうさあ、とにかくキイが元気で帰ってきたんじゃ」

「おうよ、明日からはまた精出して働かんとなあ」

そうして寝ついた夜だから、なおさら、夜をまたいで覚めた目には山も、桜も、菜の花も、美しく映ることだろう。起きた端から、心が弾むことだろう。

しかしその日、村で一番に起きて外に出た男の目に映ったものは、だらりと木の枝に首をかけたまま、ゆらゆらと揺れているキイの姿だった。

背中には、おぶりひもでぐるりと縛りつけられた三つ目のこけし。その顔は、やっとおっかさんに会えたと笑い、なのにこんな格好でしかおっかさんの温もりを知ることができなかつたと、しくしく泣いているように見える。

地面に向かってだらんと伸びた右足首には、二つの鈴。わずかに湿り気を含んだ風がそよ吹くたびに魂の抜けたキイの身体が揺れ、その小さな揺れに添うように、二つの鈴がしゃんしゃんと儚い音をたてる。

しゃんしゃん、しゃんしゃん――。その音はだれを、呼んでいるというのか。

## 十四

「和尚、その娘は何という？」

「ソヨじゃよ、ソヨ」

「おおそうじゃった、そうじゃった。で、その娘はいくつになる？」

「じき三つになりよるわ」

「そうかそうか。しかしめんごいおなごになりそうだ」

「じゃろうて。末が楽しみでならん」

「おうおう、そりゃ楽しみなことだ。だども和尚よ、この顔にはなんだか覚えがあるぞ。はて、どこで会ったか…」

月に一度は寺を訪ねてくる梅婆に、和尚は厭うことなく同じ返事をする。

キイが命を絶った四年前のあの日から、にわかに物忘れが激しくなり、村の人々の顔も名前もおぼろげになってしまった梅婆。産婆の看板も朽ち果てている。それでも紗耀寺までの道のりは忘れずにこうしてやってくるのだから、人の記憶とは不思議なものだ。

あの日、婆はキイの子を取り上げた。それはまだ七ヶ月の未熟な赤ん坊であり、命を持ったまま生まれ出てくるかどうかは、婆にもわからなかった。無理かもしれない。いや、無理だろう。気が遠くなるほどの経験を積んできた婆としても、七ヶ月で無事取り上げる自信はまったくない。しかし、産みたいのよおと涙ながらに訴えたキイが、婆の心を決めさせた。お頭の足らない、言葉も出ない、何もわからないはずのキイが、はじめて、泣いてせがんだのだ。惚れた男の子を産みたいと、はじめて自分の強い気持ちを示したのだ。

賭けである。まさに、命の賭けである。しかし、婆は思った。もしキイが命を落としてしまうことになったとしても、この子は産ませてやろう。それがきっと、ユキノとキイの希望なのだ。赤ん坊は流しても、キイ、おめは助けるぞ。そう言って逆さ屏風の裏に構えた婆であったが、泣いてすぎるキイを見て、このときまったく反対のことを思ったのだった。

赤ん坊は、なんとか形を成した人の子として婆の手の平に抱かれ、子猫のような産声をあげた。キイも、どうにか無事だ。二人を交互に見つめながら、婆は大声で泣いた。キイよ、キイよ、おめも赤ん坊も無事だ。万歳じゃあ。万歳じゃあ。そう言っては当たり憚ることなく泣いた。

しかし、小さな小さな赤ん坊は辛うじて心の臓を動かしているといった頼りなさで、いつ、ことごとく逝ってしまうかわからない。婆の寝ずの看病は三日三晩続き、キイが重湯をすすることができるようになってもまだ、いつときも赤ん坊のそばから離れることができないでいた。

そんな状況であったから、赤ん坊が消されずに光を見たことは、まだだれにも知らせていない。その場にいたタキにも、スエ婆にも、このことはまだ決して人に言うでないぞと、固く固く念を押してある。赤ん坊の様子が落ち着いて、これでいよいよ育つだろうと思う日がきたら、そのときみなに知らせればいい。

母親であるキイにも、このことはまだ伏せてある。産声を聞けば赤ん坊が無事生まれたことはわかるものだが、悲しいかな、キイには何もわからないだろう。かりに産み落とした感触があったとしても、その姿を見せなければお産の記憶もじき薄らぐことだろう。無事生まれたぞと教えてやりたい気持ちに逸ることもあったが、ぬか喜びとなってはますます不憫だ。そう思えばこそ、伏せていた。早く赤ん坊が生まれたことを教えてやりたい、あんなに求めていた赤ん坊を、早く抱かせてやりたい。だからこそ、看病にも尋常ならぬ熱を入れる梅婆であったのだ。

しかし何も知らずに家に帰ったキイは、何も知らずに和尚が彫ったこけしと出会ってしまった。そして、それを我が子の変わり果てた姿と思ったのか、キイは抱きしめ、泣き、背負い、首をくくってしまった。あと少し、あと少し待っていれば、その手で赤ん坊を抱くことができたのに。

何を悔やめばいいのか。

何を責めればいいのか。

そうして三度目の春。そよそよと春の風が笑うような娘に――そんな願いを込めてソヨと名づけられた赤ん坊は和尚のもとで大切に育てられ、今日も境内の裏できゃっきゃと声をあげて遊んでいる。一緒になって笑っているのは、四歳のハル。姉妹のように仲よく過ごす二人を、タキが、目を細めて見ている。

「おお、タキも来ておったか」

「ああ。ハルがソヨのどこいって遊ぶってきかんで」

「しかし仲のよい子らじゃ。めんごいのお」

きゃっきゃと笑いながら走るソヨ。声を出して笑うことができる、それだけでも、和尚にはありがたく思える。「まあだだよ」。かくれんぼうをしているそのくすぐったくなるほどかわいい声を聞いただけで、和尚の胸に温かい風が吹く。

しゃんしゃんと、鈴の音。ソヨのつやのある長い髪を束ねたゴムに二つの鈴が揺れ、走るたびにかわいらしい音色を響かせる。

「はて、和尚よ、この鈴の音…。なんじゃろう。なんだか懐かしい気がするが、気のせいかな。なんだか涙が出るほど温かい気持ちになるが、おれの気のせいかな」

童女のようにあどけなく小首を傾げた梅婆が、あきることなく鈴の音を追うのであった。

完

母親であるキイにも、このことはまだ伏せてある。産声を聞けば赤ん坊が無事生まれたことはわかるものだが、悲しいかな、キイには何もわからないだろう。かりに産み落とした感触があったとしても、その姿を見せなければお産の記憶もじき薄らぐことだろう。無事生まれたぞと教えてやりたい気持ちに逸ることもあったが、ぬか喜びとなってはますます不憫だ。そう思えばこそ、伏せていた。早く赤ん坊が生まれたことを教えてやりたい、あんなに求めていた赤ん坊を、早く抱かせてやりたい。だからこそ、看病にも尋常ならぬ熱を入れる梅婆であったのだ。

しかし何も知らずに家に帰ったキイは、何も知らずに和尚が彫ったこけしと出会ってしまった。そして、それを我が子の変わり果てた姿と思ったのか、キイは抱きしめ、泣き、背負い、首をくくってしまった。あと少し、あと少し待っていれば、その手で赤ん坊を抱くことができたのに。

何を悔やめばいいのか。

何を責めればいいのか。

そうして三度目の春。そよそよと春の風が笑うような娘に――そんな願いを込めてソヨと名づけられた赤ん坊は和尚のもとで大切に育てられ、今日も境内の裏できゃっきゃと声をあげて遊んでいる。一緒になって笑っているのは、四歳のハル。姉妹のように仲よく過ごす二人を、タキが、目を細めて見ている。

「おお、タキも来ておったか」

「ああ。ハルがソヨのどこいって遊ぶってきかんで」

「しかし仲のよい子らじゃ。めんごいのお」

きゃっきゃと笑いながら走るソヨ。声を出して笑うことができる、それだけでも、和尚にはありがたく思える。「まあだだよ」。かくれんぼうをしているそのくすぐったくなるほどかわいい声を聞いただけで、和尚の胸に温かい風が吹く。

しゃんしゃんと、鈴の音。ソヨのつやのある長い髪を束ねたゴムに二つの鈴が揺れ、走るたびにかわいらしい音色を響かせる。

「はて、和尚よ、この鈴の音…。なんじゃろう。なんだか懐かしい気がするが、気のせいかな。なんだか涙が出るほど温かい気持ちになるが、おれの気のせいかな」

童女のようにあどけなく小首を傾げた梅婆が、あきることなく鈴の音を追うのであった。

完